

むかし、をとこ有りけり。そのをとこ、伊勢の国に狩の使にいきけるに、かの伊勢の齋宮なりける人の親、「つねの使よりは、この人よくいたはれ」といひやれりければ、親のことなりければ、いとねむごろにいたはりけり。あしたは狩にいだしたててやり、夕さは帰りつつ、そこに来させけり。かくてねむごろにいたづきけり。…………… (伊勢物語)

『伊勢物語』の有名な第69段の冒頭の部分です。大意としては、朝廷から派遣されて伊勢まで狩に来た官人(男)を、神宮の神に仕える「齋宮」と呼ばれる女性が、親の言いつけ(いつもの使者よりも丁寧に慰労しなさい)に従い、狩に出る時も戻った際も、手厚くもてなしたということです。この段を有名にしたのは、狩の男と齋宮との禁忌の恋、許されない関係が描かれた上に、男が<sup>ありわらのなりひら</sup>在原業平(平城天皇の孫)で、齋宮は<sup>やすこ</sup>恬子内親王(文徳天皇の娘)であると、実在の人物が想定されるからです。つまり、スキャンダルの露見であり、年代も貞観7年(865)と見られています。日本最初の歌物語としての評価が色褪せることはなくても、好奇の目に曝されたことは確かです。『伊勢物語』というタイトルも、この部分に由来するとの説が有力です。

齋宮とは特別な巫女のような存在で、時の<sup>天皇の娘や孫のうちで未婚の者を占いで選びます。</sup>原則、天皇が交代するまで勤めますが、例外は親の死去や自身の病気で退下する場合だけです。役目は伊勢神宮に仕え、<sup>さんせちさい</sup>大祭(三節祭：6月、12月の<sup>つきなみさい</sup>月次祭と9月の<sup>かんなめさい</sup>神嘗祭)において天皇の名代として玉串を捧げることが主で、それぞれが2日間、年間でも合計6日間だけです。それ以外は何をされていたのか、齋宮に関する史料は少ないため、詳細は不明ということです。たまに都から貴族が訪問に来るとか、歌合を催した例もありますが、心が癒されたらどうか。

また、この女性が住まわれる所も「齋宮」と呼ばれ、伊勢神宮にほど近い別の場所に設けられていました。今でも京都から近鉄電車で行きますと、松阪市と伊勢市の間に齋宮駅があります。地元では「さいくう」と濁らずに訓まれるそうですが、古に齋宮があった跡地と言われています。尚、齋宮は独りではなく、世話役の女官が何十名も付きました。また、広大な敷地(140ha)内に齋宮寮という所轄の役所が設けられ、役人約100名(最盛期には500名ほど)が駐在したようです。現在、駅北側に「いつきのみや歴史体験館」が、齋宮跡地には「齋宮歴史博物館」が建っています。

さて、この齋宮と並び称されるのが「齋院」と呼ばれる、京都の<sup>さいいん</sup>賀茂神社に仕える女性です。齋宮と異なるのは住まわれる場所で、都の近郊、現在の紫野・七野神社あたりと見られています。齋宮より130年ほど遅れて始まりましたが、この齋宮と齋院とを合わせて「齋王」と称します。

ところで、齋王は選ばれると直ちに伊勢や紫野に向かうのではありません。まずは宮中内にて<sup>もくよくけっさい</sup>翌年8月まで沐浴潔齋(心身の不浄を祓う)し、その後<sup>のみや</sup>に洛西嵯峨野・野宮(今の野々宮神社がその跡のようです)に移り、さらに翌年9月まで潔齋を重ねるという過程を踏むのです。こうした潔齋後に場所としての齋宮や齋院に下向するわけですが、伊勢の場合だと5泊6日の旅となり、齋宮一行の旅程は「<sup>ぐんこう</sup>群行」と呼ばれます。その順路は、京都→瀬田→甲賀→垂水→鈴鹿→壱志を経ることがほぼ定着した行程でした。因みに、この順路は『日本書紀』の伝承に基いたものです。宮中に祭られた<sup>あまてらすおおみかみ</sup>天照大神を伊勢神宮へ遷座させた時に、<sup>やまとひめのみこと</sup>倭姫命(垂仁天皇の娘)が各地を巡行した軌跡なのです。内田康夫の小説『齋王の葬列』にも登場しますよ。

源氏物語と齋王

齋王は『源氏物語』にも登場します。「賢木」の巻では、六条御息所(源氏の恋人)の娘が齋宮に卜定(占いで選ぶ)され、伊勢に下向するくだりがあります。六条御息所は源氏との仲を清算するため娘と一緒に都を離れるつもりです。齋宮の母が伊勢まで同伴することは慣例に無いわけですが、史実では一件だけ例外があって、貞元2年(977)円融天皇の時、齋宮の規子内親王と母の徽子女王(この方も元齋宮です)とのケースです。これが物語のモデルかも知れません。

徽子女王は「齋宮女御」の名で知られ、三十六歌仙の一人としても有名です。父親は重明親王で醍醐天皇の第四皇子、母親は寛子で時の権力者藤原忠平の娘、徽子女王はその二人の長女です。圧倒的な毛並みを誇るうえに、歌はもちろん、琴の名手でもありました。美貌と知性と聡明さを兼ね備えた方でしたから、齋宮を退下された時には周囲から引く手あまたという状況でしたが、村上天皇の6人目の妃として女御とされました。それゆえ、「齋宮女御」と呼ばれます。

また、齋王の中で唯一、多くの画像が残っており、ことに「三十六歌仙」は人気が高いものです。大正8年(1919)のこと、彼女を含む「佐竹本三十六歌仙絵巻」、この国宝級のものが売りに出され、財界要人でも一括購入できないほどの値が付いたのです。それでやむなく、しかしあろうことが絵巻を切断し、1枚ずつバラ売りするに至りましたが、この時の最高額は「齋宮女御」でした。

賀茂祭(現在の葵祭)を描写した「葵」の巻にも登場します。齋院が賀茂川で御禊(手を洗い清めるというみそぎの儀式)を執り行なう場面が出てきます。さらに圧巻は行列当日で、源氏の妻である葵の上が車を仕立てて見物に出掛けた時です。この時、大変な群集で良い場所が確保できません。同じように噂の六条御息所も人目を忍んで車を出しておられたので、双方がかち合っしまい、不幸にも場所取り争いが起きるのです。実は、源氏が齋院行列の勅使に選ばれて参加するので、女性二人はそれぞれの立場・思いで見物したかったわけです。しかし、争いがもとで女性二人の仲違いが始まり、その後は物の怪に憑かれた葵の上が出産後に亡くなるという結末となります。何とも薄気味悪く、哀しい描写ですが、「車争い」と呼ばれる、とても有名な場面です。

齋王行列は貴賤を問わず人々の注目の的で、かの藤原道長も通り(一条大路)の棧敷に陣取って見たそうです。噂に聞く人を一目でも見たいという気持ちは、今も昔も変わらないようですね。

さらにまた興味を掻き立てるのが、華麗な飾り付けや衣裳ではないでしょうか。当時は身分によって使用できる衣の色目が決まっていたと聞きます。表と裏、あるいは何枚も重ね着した時の衣色の配列が身分の証しでしょうし、さらには教養やお洒落を競うものでもあったと思います。参考までに代表的な配色(裏ね(重ね)の色目と呼ぶ)を見ますと、色彩も多様、色使いも絶妙で、瑞々しい感性が羨ましいですね。但し、齋王は白・赤・黄色が基調であったとのこと。

重ね着の配色) 杜若・・・淡紫・薄色・薄色・青・淡青・紅



裏表の配色) 季節により、下記のような例がある。

- 春) 紅梅・・・表は紅梅色・裏は蘇芳色
- 夏) 葵・・・表は淡青色・裏は淡紫色
- 秋) 朽葉・・・表は濃紅色・裏は濃黄色
- 冬) 椿・・・表は蘇芳色・裏は赤色



齋院の起源は嵯峨天皇(在位 809~823)の時代です。天皇の兄にあたる平城上皇が復位を狙って叛乱(菓子<sup>くすこ</sup>の乱)を起こしました。乱は早期に鎮圧されましたが、嵯峨天皇は賀茂社の神に勝利を祈願して齋王を置くことを誓い、弘仁元年(810)に皇女の有智子<sup>うちこ</sup>内親王を齋王としたのです。

齋宮とは違い、天皇の交代で退下するとは限らなかったようで、選子<sup>のぶこ</sup>内親王(村上天皇の娘)は、円融~後一条天皇の五代、実に57年間も在職され、「大齋院」と称されました。後宮文学の大御所でしょう。彼女が上東門院彰子に新風の物語を所望したので、『源氏物語』が生まれたそうですよ。仕えた女官からは優れた歌人を輩出、文芸サロンを形成しました。都に近い齋院ならではの話で、遠い伊勢では叶いません。年若い女性ならば寂しさもひとしお、許されぬ恋も同情すべきか。

葵祭の名称の由来は、牛車や祭使の冠に「フタバアオイ」が飾られるからですが、この植物名に「葵」の文字を初めて用いたのは紫式部です。ですから、切っても切れない関係があるわけです。

葵祭は応仁文明の乱の影響で200年ほど中絶しますが、復活後は徳川家が三葉葵を家紋にしたので、一般にも呼称が定着したようです。さらに明治初期にも14年間中断しましたが、これを復活させたのは岩倉具視による斡旋でした。そして近年になると、第二次世界大戦で一時的に中絶し、昭和28年に再興され、今日に至っているのです。

今日の葵祭では、「齋王代<sup>さいおうだい</sup>」という女性が登場します。文字通り、まさに齋王の代役です。後醍醐天皇(在位 1318~1339)の時代に途絶えていた齋王でしたが、祭行列に華を添えるために、昭和31年(1956)に肝煎りで復活されました。あくまで代役なので、卜定も潔齋もいたしません。今は地元の老舗や名家のお嬢さんが選ばれますが、今年の第50代齋王代は齋藤彩子さんです。

余談ながら、藤原氏繁栄の基礎を築いた藤原良房(804~872)が、一族の氏神である春日神社に仕える「齋女」というものを創出したことがあります。天皇家に準ずる権威付けのためでしたが、やはり無理があったのでしょうか、彼の死後、早いうちに廃止されていますね。

齋王とは詰まるところ、天皇の分身として皇祖神・天照大神と交わることが大きな役目です。あらゆる儀式も神聖視された理由もそのためでしょう。そうすると素朴な疑問があるのですが、天照大神が通常いわれるように女神であれば、なぜ皇女(女性)が齋王に選ばれるのでしょうか？ 従来より関係者や学者などが調査してきましたが、『古事記』や『日本書紀』の伝承を始めとして、天照大神が間違いなく女神であると断定するのは難しいそうです。どうも腑に落ちませんねえ。天照大神は、もしかすると男神ではないのか？ 古い時代には男神と考えていたのではないのか？ あるいは性というものを超越した存在なのか？ 次から次へと疑問が湧いてくるわけです。

話が飛ぶようですが、最近では女帝論議が盛んです。憲法(法の下での男女平等)と皇室典範(皇位は皇統の男系男子が継承する)との整合性が問題のようですね。天皇家の場合には、血統なり性別は殊のほか大きな問題です。もし女帝容認となれば、伊勢神宮や皇祖神天照大神、さらには諸々の儀式はどのような意味を持つのか、関心を超えて、不可思議な気がしますね。かつて平塚雷鳥は「原始、女性は太陽であった」と宣言しましたが、草葉の陰で事の成行きを注視しているかも。